

迅速なアプリケーション開発のためのDB非依存ミドルウェア構築 DB independent middleware for rapid prototyping

若山 史郎*

WAKAYAMA Shirou

概要

アプリケーションのプロトタイピングはいかに迅速に行うかが重要である。多くのアプリケーションは外部にDBを持つが、DBの選定や準備、設計に時間がかかり、また、DB実装の差違などにより、迅速なプロトタイピングが妨げられることがある。本研究ではXIRDと呼ぶDBに非依存なミドルウェアを構築した。XIRDはXMLおよびXML-RPCを利用することでDB実装に依存せずに、アプリケーションを容易に開発できる。また、多くのアプリケーション実装言語から容易に利用できる。さらにXIRDを利用したサンプルアプリケーションを実装し、本研究の有用性を示した。

1. 背景

Web用アプリケーションなど、現在のアプリケーション開発では、データ交換形式や外部保存形式などにXMLを利用することが増えている。

XMLは階層構造に従ってデータ構造とデータ自身を同時に記述することができる。また、データの意味を人間が理解可能な形でタグ名として表現することができる。このこともXMLが広く利用されている理由の一つである。

データを保持するためにRDBMS (Relational Database Management System) が多くの場面で使われている。RDBによりデータの結合や抽出を容易に行うことができ、また実装も多く実行速度にも優れている。

RDBMSを使用する場合、データ構造をあらかじめ規定しておく必要がある。さらに、データ構造を綿密に設計しておくことで、速度や保守性が向上するため、構造設計にコストをかけることが多い。しかし、プロトタイピングなど開発初期段階では、データ構造が変化することが多く、これには多大なコストがかかってしまう。

一方、XMLはタグを利用することでデータの意味や属性、データ構造をXML自身が表現できるため、データ構造を変更した場合でもアプリケーション全体に対する影響は少なくなる。

以上の理由によりデータ構造の変更が頻繁におきるプロトタイピングや開発初期段階では、データ保持形式としてRDBよりXMLを選択したほうが好ましい。

本研究ではXIRD (common XML Interface to Relational Database) と呼ばれるソフトウェアを構築した。XIRDはRDBへのインタフェースをXMLを利用して記述することができる。XIRDを使用することで、アプリケーションはRDB内のデータ構造を意識することなく、XMLだけでRDBを使用することができる。これにより、柔軟なデータ構造が変更でき、アプリケーションが迅速に開発できる。

2. 関連研究

2.1 Perl DBI

Perl DBI[3]は関数、変数、規約などを定義することで、RDB実装間の差違を吸収するための機構である。これは、API (Application Programming Interface) として多くの言語に対して提供されている。

Perl DBIを利用することで異なるRDB間の情報のやりとりを簡単に行うこともできる。つまり、あるRDB実装Aと別のRDB実装Bを単一ソフトウェアから同様にアクセスすることで、AからBへとデータをコピーすることも容易に可能である。

しかし、Perl DBIはあくまでDB実装間の差違を吸収するためのものであり、RDBの枠組を越えるものではない。

2.2 O/R マッピング (Object/Relation Mapping)

Javaなどのオブジェクト指向型言語からRDBをオブジェクトとして扱う場合、オブジェクトとリレーションという異なるモデルを統合する必要がある。O/Rマッピング (Object/Relation Mapping) とは、そのためにこれら二つをマッピングするものである。

これにより、あたかもオブジェクトを扱っているかのようにRDBを扱うことができる。O/RマッピングツールにはHibernate[2]などがある。

異なるモデル間をマッピングによって接続するアイデアはXIRDと同等である。しかし、XIRDはXMLを用いることで言語に依存しないマッピングを実現する。

3. 設計

3.1 設計方針

XMLは階層構造を元にデータ構造を記述する。しかし、一般的にRDBは列と行からなる二次元の表で構成される。そのため、単純にXMLからRDBへの変換は難しく、NeoCore XMS[1]などのXML DBのようにXMLの階層構造をそのままDBに保持する研究が盛んに行われている。

一方XIRDはあくまで迅速なアプリケーション開発に主眼を置き、そのための手法としてXMLを選択した。

XIRDでは、データ構造に制限を持たせることでXMLからRDBへの変換を容易にした。そのため、XIRDは基本的な機能しか持たない。また、XIRDはあくまで迅速なアプリケーション開発のためのミドルウェアであり、プロトタイピングが主目的である。従って、大規模あるいは高信頼性が求められるアプリケーションは想定しない。

また、一般的なWebアプリケーションでは、RDBの全ての機能を使うわけではなく、データの参照、変更、追加、削除といった基本的な機能だけを使うことが多い。従って、RDBが持つ機能全てを実現せずとも、プロトタイピングには多くの場合十分と考える。

*株式会社東芝 研究開発センター 通信プラットフォームラボラトリー

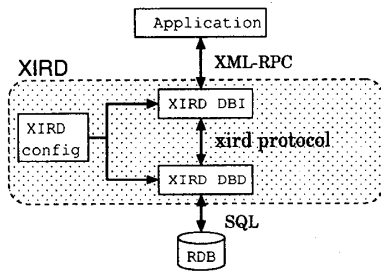


図 1: XIRD 全体概要図

提供する機能

これまで述べてきた設計方針に従い、XIRD が提供する機能を以下に示す。

- 情報の提供/追加/削除/更新：XIRD はこれら DB が持つ基本的な機能を備える。
- ロールバック：特に複数人が同時にアクセスする Web アプリケーションなどを想定した場合、情報の追加、削除、更新など RDB の情報を変更する機能は他者が行う変更と衝突を招く可能性がある。これを回避するための最低限の機能として、ハッシュ関数を用いたロールバック機能を提供する。

3.2 全体概要

図 1 に XIRD の全体概要図を示す。

XIRD は、大きく XIRD DBI (XIRD DB Independent, 以下 DBI) および XIRD DBD (XIRD DB Dependent, 以下 DBD) モジュールの二つに分けられる。本節ではこれら XIRD の構成要素について述べる。

3.3 XIRD DBI

DBI モジュールは提供するアプリケーションごとに一つあり、アプリケーションからの要求を待ち受ける。アプリケーションは要求を XML 形式で DBI に送信する。

要求を受け取った DBI は後述する XIRD 設定ファイルに従って XML を解析する。解析した結果を DBI は DBD に対して送信する。

これに対して DBD は RDB に対する処理を行い、DBI に返信する。DBI は XIRD 設定ファイルに従い XML へと変換し、アプリケーションに返信する。

3.4 XIRD DBD

DBD モジュールは、さまざまな RDB における実装の差を吸収するためのモジュールである。

DBD は DBI からの要求を受け、RDB に対して要求を発する。また、要求に対する返答も DBD が受けた後に DBI に戻される。

RDB に対して直接アクセスするため、DBD は RDB の実装ごとに異なる。

3.5 XIRD Config (XIRD 設定ファイル)

XIRD は、各アプリケーションごとに設定ファイルを作成する。

この設定ファイルは、XML のタグ名で与えられるデータと RDB でのデータとの関連付け (マッピング) および RDB の設定が記載される。RDB の設定には DB のホスト名やユーザ名、パスワードなどが含まれる。

関連付けでは、XML のタグ名と RDB でのカラム名は一对一で対応しなければならない。また、XML は階層構造をとるため、異なる枝に同一名のタグが存在することが可能だが RDB は同一テーブル内では不可能である。そのため、XML のタグ名も RDB でのカラム名と同様一意でなければならない。

DBI および DBD はこの設定ファイルに基づき、アプリケーションと RDB との仲立ちを行う。

3.6 XIRD で使用される XML

情報の取得

情報の取得要求に含まれる XML の例を図 2 に示す。

図 2 には、`<xird:query>` タグがあり、その一段下には `<nutrition>` タグがある。この要素名がテーブル名となる。また、この要素の内容にはテキスト内容を含む `<id>` 要素がある。`<xird:query>` 内容のその他の要素にはテキスト内容を含む要素は存在しない。

XML を受け取った DBI は、`<xird:query>` タグ内のテキスト内容を含む要素 (この例では `<id>` 要素) を条件式に、その他の要素を要求するカラムとして解釈する。

従ってこの要求例は SQL 文で表すと以下ようになる。

```
SELECT energy, protein, company, product
FROM nutrition WHERE id = 12345;
```

なお、テキスト内容が含まれる要素が複数ある場合、条件式はそれらを `and` でつないだものとして解釈される。

この要求に対する DBI からの返答に含まれる XML を図 3 に示す。`<xird:row>` 要素の中に含まれる形で返答が記載されていることが分かる。条件に適合する要素が複数ある場合、`<xird:row>` は複数存在する。

また、`<xird:row>` 要素は `serial_no` 属性を含む。この属性にはカラムを一意に示すための `primary key` が記載される。

XIRD 内でなんらかのエラーが生じた場合、DBI は内容にエラーが記述された `<xird:error>` 要素を付与して返信する。

情報の更新/追加/削除

返答に含まれる `serial_no` を指定することで、情報の更新/追加/削除ができる。

図 4 に情報の更新および追加の例を示す。

更新は `<xird:row>` 要素の `serial_no` 属性を指定し、更新する情報を `<xird:row>` 要素の内容に記述することで行われる。図の例では RDB 内の `product` というテーブルの情報を `<product>` 要素の内容に更新するよう指示している。

追加は `<xird:row>` 属性に `serial_no` が含まれない場合に行われる。追加は、前述の設定ファイルにおける `accept_null` 属性が `false` であり、その要素が含まれていない時に DBI はエラーを返す。

削除は `<xird:row>` が空要素である場合に行われる。

```
<?xml version='1.0'?>
<xird>
  <xird:query>
    <nutrition>
      <id>123456</id>
      <protein />
      <company />
      <product />
    </nutrition>
  </xird:query>
</xird>
```

図 2: 情報の取得要求の例

```
<?xml version='1.0'?>
<xird>
  <xird:result>
    <xird:row serial_no='3'>
      <id>123456</id>
      <protein>0.0</protein>
      <company>東チョコ S</company>
      <product>ライスチョコ</product>
    </xird:row>
    <xird:row serial_no='8'>
      <id>test</id>
      <protein>0.0</protein>
      <company>ダミーデータ</company>
      <product>ダミーデータ</product>
    </xird:row>
  </xird:result>
  <xird:hash>4e1bfd0ce75dccc59895d473ba626bee
</xird:hash>
</xird>
```

図 3: 要求への返答の例

4. 実装

XIRD は Ruby-1.8 を、XML パーザには REXML[5] を利用して実装した。

4.1 XIRD DBI

アプリケーションは DBI に対して XML-RPC[6] を利用して要求を送る。また、DBI、DBD 間の通信は XIRD 独自のプロトコルに従って行われる。

4.2 XIRD DBD

DBD は、DBD モジュールそのものと使用する DB に依存する部分に分離している。DBD モジュールは主に DBI との通信を担当する。DBI から受けた要求をその DBD モジュールが扱う DB に対する要求へと変換する。この変換には、DBD は Ruby/DBI[4] を使用した。Ruby DBI は Perl/DBI の Ruby 実装である。

DBD モジュールは設定ファイルから DB に関する設定情報を読み込む。DBD はこの設定に従って、適切な DB 依存部分呼び出す。

4.3 XIRD Config

図 5 に XIRD 設定ファイルの一部を示す。

<mapping> 内容に XML 要素名と DB のカラム名との変換マップを記述する。例えば、

```
<?xml version='1.0'?>
<xird>
  <xird:query>
    <xird:row serial_no='3'> <!-- 更新 -->
      <product>製品名変更</product>
    </xird:row>
    <xird:row <!-- 追加 -->
      <product>高タンパク質食品</product>
      <energy>581</energy>
      <protein>9999.0</protein>
    </xird:row>
    <xird:row serial_no='8'> <!-- 削除 -->
    </xird:row>
  </xird:query>
  <xird:hash>4e1bfd0ce75dccc59895d473ba626bee
</xird:hash>
</xird>
```

図 4: 情報の更新/追加の例

<id><map datatype="varchar(13)" accept_null="false" /></id> という記述は、XML 要素名および DB のカラム名が "id" であり、DB におけるデータ保持形式が "varchar(13)" であることを示している。

また、<map> 要素の accept_null 属性は、情報の追加時に必須な情報であることを示している。この属性が false である場合、情報の追加時には空要素が受け入れられないことを示す。

4.4 ロールバック機能

XIRD ではアプリケーションが情報を取得した際に、その情報を一方向ハッシュ関数にかけた値もアプリケーションに対して送信する。アプリケーションが変更する際にはこのハッシュ値も同時に XIRD に対して送信する。

XIRD はアプリケーションから受け取ったハッシュ値と、XIRD が DB から再度取得した情報をハッシュした値とを比べ、一致していれば情報を変更する。一致していなければ他者が変更を行ったものとして変更せずエラーを返す。

4.5 XIRD Compiler

XIRD を利用する際でもテーブル作成など初期には RDB 自体を扱う必要がある。そのため、XIRDCompiler を実装した。これは、XIRD 設定ファイルからテーブルの作成など、RDB の初期設定を行うスクリプトを生成するものである。

しかし、これらの設定に関する記述方法は DB 実装に極めて依存しているため、XIRDCompiler はあくまで雛型でしかなく、問題が起きれば手動で修正する必要がある。また、複雑なトランザクションなどは記述できない。

5. 評価

カロリー DB

XIRD に対する評価の一つとして、カロリー DB と呼ばれるサンプルアプリケーションを作成した。

このサンプルアプリケーションは、飲食物など商品が含むカロリーなどの栄養素に関するデータベースである。

```

<?xml version='1.0'?>
<config>
  <database>
    <xird_dbd>localhost</xird_dbd>
    <dbname> shirou </dbname>
    <username> shirou </username>
    <dbtype> Pg </dbtype>
    <primary_key>xird_serial</primary_key>
  </database>
  <mapper>
    <mapping>
      <nutrition>
        <id>
          <map datatype='varchar(13)''
            accept_null='false'' />
        </id>
      </nutrition>
      <energy>
        <map datatype='real'' accept_null='true'' />
      </energy>
    </mapping>
  </mapper>
</config>

```

図5: XIRD 設定ファイルの例 (一部)

保持されている栄養素情報は商品に添付されているバーコードをキーとして呼び出す。

図6はカロリーDBの情報取得画面の例である。図に示されているように登録されている商品のさまざまな栄養素を表示できる。

これらの栄養素はユーザ自身が登録する。より多くのユーザが登録することにより、さまざまな商品に関する情報が蓄積される。このような情報はダイエットや健康のために役立ち、さらには介護・医療分野においても有意義であると考えられる。

情報取得だけでなく栄養素情報の追加もXIRDを経由して行われている。図で示したようなカロリーDBに対するWebインタフェースはphpで実装した。また、phpからXIRDを扱うための共通ライブラリも作成した。

XIRDを使用することで3時間程度でプロトタイプングが完了した。また、作成途中でビタミンなどその他の栄養素についても情報を追加したいとの要望があり追加を行った。また、i-mode用の簡略化されたページも作成して欲しいとの要望もあった。これらの要望はごく短時間で実現できた。

派生クライアント

XIRDを使用することの利点の一つとして、Webアプリケーション以外にもさまざまなクライアントを容易に実装可能という点があげられる。カロリーDBに対するもう一つのサンプルクライアントとして、カロリーの値のみを取得し、値をcsvファイルに書き出すアプリケーションを作成した。このcsvファイルからは容易にグラフを生成することができる。

XMLとしては、カロリーDBのサブセットとしてカロリーのみを取得するXMLをXIRDに送信している。XIRDを利用することで将来データ構造が変化した場合

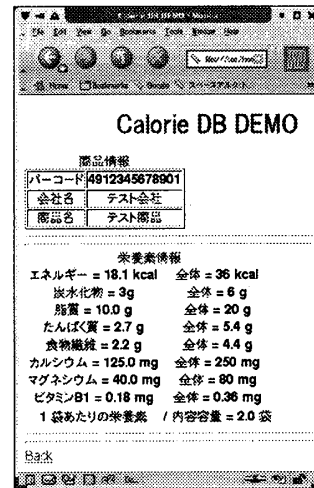


図6: カロリーDB 情報取得画面

でもクライアント側はなにも変更する必要がない。

6. まとめと今後の課題

本研究では、アプリケーションがXMLを使用してRDBを扱うためのミドルウェアであるXIRDを開発した。XIRDにより、以下の利点が得られた。

- アプリケーション開発中にデータ構造の変更を行ってもRDBを変更する必要がない
- アプリケーションはDB実装の差を認識する必要がない
- データ構造に依存しないためソースコードの再利用が容易である

今後の課題として、現在のXIRD実装ではDBIおよびDBDに認証機構などのセキュリティ機構が未実装である点があげられる。今後はこれらの問題点を解決していきたい。

謝辞

WIDE Project XIRD WG および Auto-ID WG のみなさまには、議論に参加すると同時に、サンプルアプリケーションのテストをして頂きました。御協力に深く感謝します。

参考文献

- [1] NeoCore XMS <http://www.neocore.jp/>
- [2] Hibernate <http://www.hibernate.org/>
- [3] Perl DBI <http://dbi.perl.org/>
- [4] Ruby DBI <http://ruby-dbi.sourceforge.net/>
- [5] REXML <http://www.germane-software.com/software/rexml/>
- [6] XML-RPC <http://www.xml-rpc.com/>